

岩波の月刊誌『世界』の3月号に、『世界』の編集長や岩波書店の社長をした岡本厚氏が「池明観先生と『世界』」と題して、今年の1月1日に97歳で亡くなられた池先生のことを書いている。読んで、池先生のことを懐かしく思い出したので、そのことを書きたい。

『世界』に、1973年から88年まで、15年間にわたり、「TK生」という匿名で「韓国からの通信」が連載されていた。私は、宮崎県延岡で、牧師になろうと悪戦苦闘をしていた。「韓国からの通信」は本当に励まされる読み物で、『世界』が来ると、真っ先にむさぼるように読んだ。韓国の軍事政権が民主化を求める勢力を弾圧し、激しい拷問を加えていた時代、それこそ、命を賭した民衆の闘いが記録されていた。新聞やテレビでは見られない、韓国人の苦悩、涙、怒りが綴られ、痛々しいほどの叫びである。しかし、その中でも、「美しい春が訪れてくる」と、常に希望が語られていた。印象に残っているのは、一人の母親が、息子が捕らえられ、入れられた刑務所の塀の前で、極寒の中、息子の名を呼び、「転ぶじゃないぞ」と声をからして呼びかけているシーンである。刑務所の中で、どれほど酷い仕打ちをされていても、軍事政権の横暴に妥協するなどの母の声は凄まじい。韓国では、これほどの覚悟を持って、民主化を渴望しているのだと知らされた。そして、韓国の実態を世界に発信している著者TK生とは誰なのか、民主化闘争の実態を秘密に伝え合うルートはどこにあるのかと疑問を持ち続けた。また、抵抗詩人・金芝河の権力に抑圧される側に立って、あえて苦悩を負おうとする生き方や詩に圧倒されていた。この時代、民衆が歴史の主体であるという「民衆（ミンジュン）神学」が形成されていった。

池先生は軍政に抗い、疲れ果てて1972年に、亡命するように来日された。東京女子大の教授になられ、農村伝道神学校の講師もされていた。1978年頃に、私は農村伝道神学校で、池先生の講義を聞く機会を得た。私は、池先生の知性と言葉の強さに感銘を受け、熱心に講義を聞いた。ある時、池先生に「私は『韓国からの通信』に励まされ、愛読しています。著者の『TK生』とは誰なのでしょう。韓国政府は血眼になって探しているでしょう」と言った。池先生は、何も語らず、ニコニコ笑っておられた。ところが、2003年に、「TK生」は池明観先生であることが報道された。私は本当に驚いた、そして、あり得ることだと思った。韓国との交流の深かった牧師に電話したら、「TK生」は池明観先生であることを知っている口調であった。彼は秘密ルートを担っていたのであろう。

人権無視の軍事政権下、郵便物は開封され、電話は盗聴される中、韓国内で集まる資料や情報を日本に送る手立ては、韓国の教会を歩き回っても疑われないドイツ、米国、カナダ、日本の宣教師たちが、その務めを果たした。資料、情報から、池先生が「アンカー」として、『韓国からの通信』を書き続けた。15年もの間、秘密が発覚しなかったのだから、見事なネットワークであった。岡本氏は『世界』で、「『知識人の時代』というものがあ、それは物言えぬ民衆の代弁者としての知識人が先頭に立って権力の不正や暴虐を暴き、追求し、戦う時代であったとすれば、池明観先生はそのもっとも知識人らしい知識人であった」と紹介している。池先生は、岡本氏が言うように、まさに、民衆の苦悩を代弁する働きを全うされた。韓国が民主化し、池先生は帰国され、死刑囚であった金大中氏が大統領になった時、韓国と日本の文化交流に尽力された。岡本氏は、池先生は民主化運動時代、現場にいなかったことに罪責感を持たれていた、また、民主化後、大衆消費社会の大きな波に飲み込まれ、知識人の時代は終わりを告げていたと報告している。